

1966

S41

SUAC

記録集

1966年度冬山合宿

春山会報

1967年度

新人合宿



信州大学山岳会 上田山岳部

1966年度 冬山合宿(後立山連峰縦走) 12月17日～12月26日

参加部員 CL 岡村, SL 佐々木, 三河原 真

12月17日 上田 ~~→ 松本~~ 松本(思誠寮)

18日 松本 ~~→ 白馬大池~~ 白馬大池 ~~→ 親ノ原~~ 親ノ原 → 鶴峰手前
天気(快晴)

親ノ原より2基のリフトの間を歩くラッセルはそれほど深くないが、初日であり、又熱くてバテたのでついにリフトにのっかた。このリフトの終点よりおし行き柵池を目の下に見える所にテントを張る。この夜ラジオがボコンとなる。このことがこの合宿の成否を採めたとも言えよう。

12月19日 TS → 柵池小屋 → 天狗原 → 白馬大池
天気(晴 → くもり)

TSより柵池へトランス気味に下る。柵池から天狗原への斜面、又乗鞍岳の斜面とも雪崩の心配全くなし。大池では池の上を歩くが何んとも無気味であった。天気が下り坂でもありラジオが役に立たないので明日の天気の手想も立たない。柵池より小蓮華山と乗鞍岳の鞍部へ登り、一日で白馬岳へ行くことは可能であった。全員不十分なく、又研究不足で1日損した。

20日 沓瀬 天気(地吹雪)
行動可能であった。

21日 TS → 小蓮華山 → 三国境 → 白馬岳
天気(風雪)

朝方は天気はそれほど悪くはなかったが、風が強し。出発のころ見えていた曾倉岳も三国境へ近づくにしたがって雪の中へ消えてしまった。三国境を過ぎると黒部側からの風がものすごく、視界も悪くなる。三国境・白馬岳間は以外と時間を食う。山荘の冬小屋へとにげこむ。小屋の中は雪がこぼれ雪をばらしてテントを張る。後立山の稜線では本日ぐらいの風は普通かもしれない。防寒防風には十分注意が必要。

22日 沓瀬 天気(地風吹)

昨日来の風が今日は一般に増して吹きまくっていた。キツに出るのにおおくなり。沓が噴当なところかもしれない。

23日 TS → 鐘ヶ岳 → 天狗小屋 → 不帰Ⅱ峰北峰直下
天気(快晴)

テントの徹夜に時間を食う。2時間という貴重な時間をのがしてしまった。天狗までは雪のしたた枝稜を快調にとぼす。天狗の天下りは雪も少なく、又雪と岩なじんでおらず悪かった。(上部) 不帰Ⅰ峰は問題なく通過をこよりトレースがありがたい。Ⅱ峰の下部にはクサリもハシゴもあり問題なく行くも、一ヶ所、完全な岩登りの所があり、人間と荷物を別々に上げる。Ⅱ峰北峰の登りのほぼ間にテントを張る。白馬・唐松間を1日で消化することは我々の力で十分可能であった。朝のもたつきが一日の行動に大きくむびいた。

24日 3035 天気(風雪)

昨日の晴天も一夜にしてものすごい吹雪になる。2名がⅡ峰南峰まで偵察に出る。北峰の登り(ルンデ中)にリール(20m)をフックスする。ものすごい風に目もあけていられぬほどであった。

25日 TS → 唐松岳 → 八方尾根サージェント
天気(風雪)

昨日のフックスのためⅡ峰北峰までは意外と早く行く。北峰と南峰の間は雪と岩がなじんでおらずいやなところであった。こより唐松頂上までは問題なし。雪の為何にも見えない。そのまゝ八方尾根を下る。

26日 TS → 和田野 → 四ツ谷 → 上田
バス

反省

計画では白馬岳、刈薙ヶ岳まで縦走の予定であったが途中で下山と相なった。この原因としてはまずラッコの故障がまず考えられる。かたが、それ以上にパーティー全員のフィット・研究不足があったと思う。今後の我々の山行に大きな問題を残したと言えよ。

不帰Ⅱ峰の雪と水によって装飾された岩壁のすばらしさだけが我々の心の中に残っている。

“ 行こお。北尾根天峰正面へ ”

(人だろキ)

戸隠金山縦走記録

1967年3月

昨年の春以来、何回かの山行が戸隠で行なわれた。今年の春はその一区切りとして、金山縦走を行なった。

3月20日 (晴)

バスで鬼無里まではいる。西京方面へ行くバスには相当時間があるので、歩いて行くことにする。当初の計画では冷沢よりハオムにとりつくことになっていたが、予定を変更して、根上より左にお川、落合よりとりつくことにする。落合は家4戸、人口10人という小部落で、若い人は町へでてしまったそうだ。沢にそって進む。1時間ほど行くと川が急角度で左にまがる。付近を偵察する。ここにテントを張ることにして、川にそって偵察に行く。(佐々木、...)

鬼無里(10:40-11:10) → 落合(2:00) → テント地(3:00)

偵察(3:30) → (4:15)

21日 (曇)

テント場を出て約5分ほどトチ平につく。古小屋と小さな池がある。手前の大きな尾根にとりつく。樹林帯を約400m登ると稜線にでる。後立山の山脈が美しい。ハオムまでは単調な登りであるが、いくつかのピークをこえる。ハオムの南面は比較的大きな岩壁になっていて、物見山から采たらしきそうだ。ハオムより尾根がたいに北東に進む。小ピークをいくつか越える。黒鼻との中間地点あたりから北にまがる。細い雪稜がところどころある。黒鼻山の手前にテントをばる。

出発(6:30) → トチ平(7:20) → 稜線(9:30) → ハオム(11:55) → テント場(15:00)

22日 (吹雪後晴)

泥濘。10時ごろより晴れあがり、行動すべしづよいぐらいになった。西岳の裏側がすばらしい。

23日 (雪時々晴)

黒鼻山は南北にいくつかのピークが集合した山だ。最高点は一帯北のピークである。東山は大きなコルの次である。左手は大きく切川おち、右側もゆるやかなだが視花川までおちている。東山は東西に二つのピークをもつ双耳峰で、東峰のさらに東に大きな岩壁をもつ岩峰がある。東峰より北におりるが、その尾根はそのまま下へいってしまふ。ガスの中に入ると左手に主尾根がみえる。トラバースして、雪ピの飛達した雪稜に入る。次のピークが東北稜との分岐点である。下降地点はかなり急で細いので他にルートを探めたがない。天候も悪いので東北稜にテントを張ることにする。

テント場(7:10) → 黒鼻山(7:45) → 東山(9:30) → ピーク(11:30) → テント場(12:00)

24日 (雪後晴)

昨夜来の雪で積雪は60cm以上、ツカンをつけてもひざ上10cmもある。昨日のピークまでのほり、下降路をフックスする。ここから少し登った所が奥西山らしい。地図ではかなりの登りになっているのだが、このあとはずっと下りである。西側が切川、東側に大きく雪ピをつけた比較的細い尾根で、階段状の小ピークがいくつもある。途中で雪ピと落したら下は雪崩になっていた。約2時間で出合(湯沢からの)につく。丁度奥西と中西の中間地点で湯沢からの登山道になっている。(たて札あり)奥西までは幅の広い尾根でところかまわず雪ピができていた。うさぎが一匹おとろいとてけいっていった。風でできた雪紋が美しい。だらだら登りの最後に奥西の最高点がある。東山、黒鼻山が丁度おとぎ話の西洋の城が山の上にたっているけしきになっている。堂津岳の登りは、左が切川、右も急斜面である。150mほどのほってテントをほる。

テント場(8:10) → 出合(11:05) → 奥西山(12:30) → テント(15:20)

25日 (晴)

昨日のつづきの尾根とのぼる。しばらく行くと凍り寒くはついているので右側に降りて、トラバースする。堂津岳の支稜を三つ越えると、直下のコルである。

頂上は南北に長い。堂津へは登る前に見上げる。1時間ほどニアロ川と湯沢の分水嶺に達する。低いせいかウチ等がみられる。急坂と登り、4つ目のピークが1558mのピークである。途中新路線の山岳会が梁境縦断を行なう時のしるしがある。さらにここから3つ目のピークが谷の峰へのジャンクションで、目の前に乙妻の西壁がそびえ立っている。オオシラビソの林をぬけた所はもう乙妻の直下のコルである。少し上にテントをばす。佐々木、河原の二名がルートワークに出かける。その間、陽があたっているのでぬれたものをかわかす。

テント場(6:00)→堂津岳下コル(8:30)→分水コル(9:35)→1558m
(12:10)→テント地(14:40)
(ルートワーク) 発(15:45)→取り付(16:25)→見下(18:00)→帰着(19:00)

26日 (快晴)

テンバよりコルにおり。急斜面を150mほど登ると岩稜のとりつきである。40mサイルで3ピッチでぬける。裏道があるらしく針金がはってある。ぬけた所から頂上まで約200m。ここから高妻への道はいりくんだ雪ばかりできている。高妻頂上直下数十mの所がキレットになっている。頂上の雪ばかりがまた大きい。数mもほり出している。長い頂上を東南に下り、はま川からアエカイレンして下る。アイゼンに雪がついてこまる。五地藏までのルートがよくわかる。4つ目のピークをこえると五地藏である。裾花本谷がせり上ってきている。陽があたり、雪がくさってたいへん重い。五地藏から一不動までは樹下にくると、こしまでうまるようなところや、凍っている所など複雑だ。一不動の小屋でテホ島をしらべる。

テント場(6:05)→取り付(6:35)→新川(8:05)→乙妻(9:05)→高妻(10:55)
→五地藏(13:30)→一不動(15:05)

27日 (風雨強し)

奥氏下山。沢殿。肉をたくさんくってスタミナつける。

28日 (曇晴々晴、後風雪)

昨日の雨で雪がしま、たかと思つたら、逆にくさってしまって、表面だけ凍って中はがらん洞ということになってしまった。一不動から約150m 登ると一休庵根がある。ここから小ピークは右にまいていく。表山特有のあのゴツゴツした感じも雪で多少緩和されている。三角点ピークでの眺望はすばら

しい。信越の山々が一望の下だ。雪ピが大きく発達し、雪ヒ停止サクも付
 けていないようだ。樹木の下等は、腰あたりまでうまり、マタがなま
 たらどこまでもうまりそうなお気がする。複雑な尾根のため、ルートファイン
 ングがむづかしい。尾上清水から戸隠山までの登りはかなりのアルバイト
 った。しばらくして八才晩へ出る。二三日前にパーティがとあったらしい。
 院カイレクトを観察した後、主稜線を下る。トレースがあるかないのと同
 だ。5人のパーティらしい。途中、みどり、雲稜、のうさぎ等の山岳会の跡
 があった。尾根が本院カイレクトをアタックしたのだろう。コルより上
 の台地にテントをける。すぐに風が出て雪がふってきた。

院 (7:15) → 休尾根 (8:05) → 三角点ローク (9:10) → 戸隠山 (10:20) →
 八才晩 (11:20) → テンバ (13:45)

29日 (快晴)

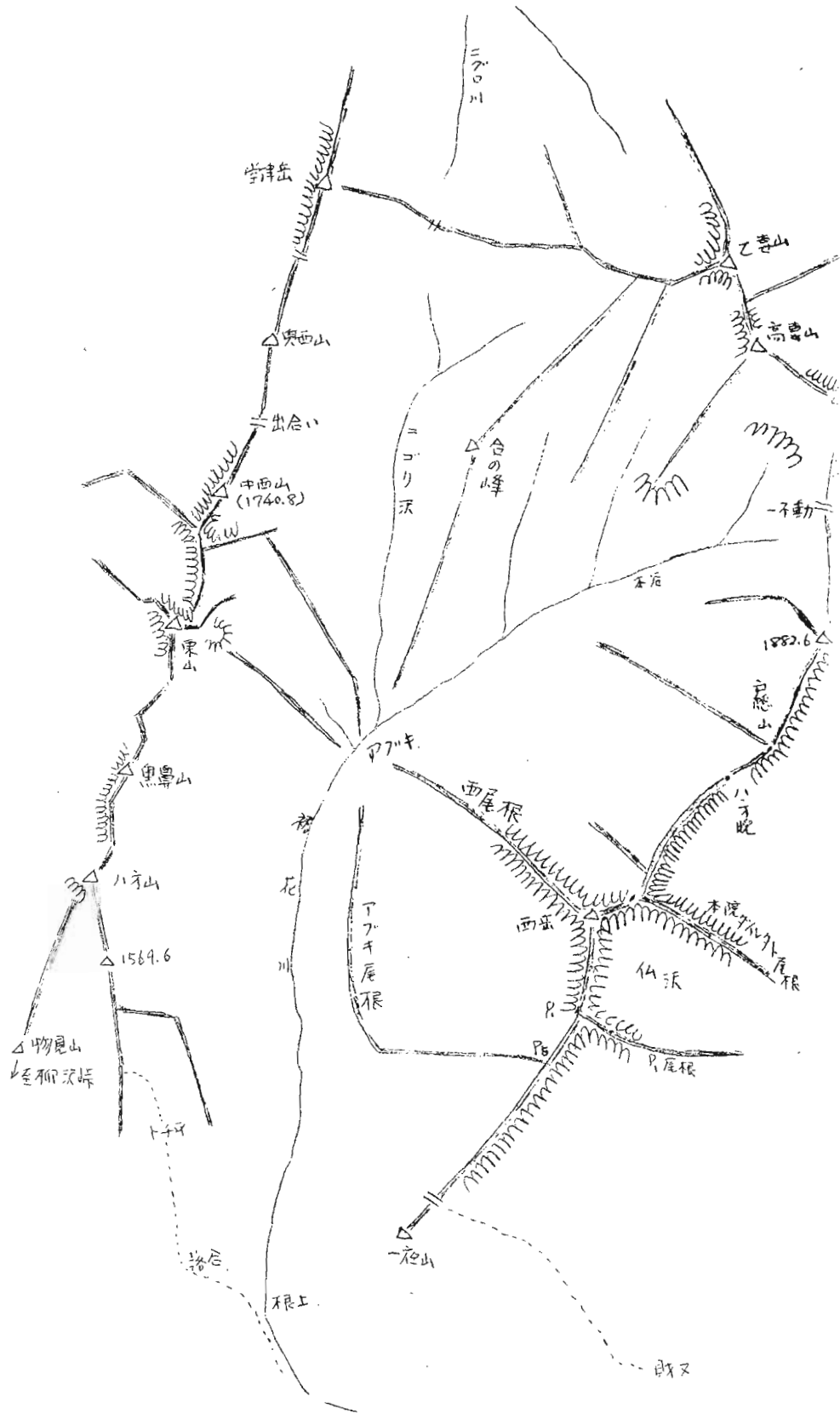
テンバからコルまで下り、左へトラバース気味にとりりの稜線にうつり
 かなり急な登りだがアイゼンがすくきいているので苦勞は少ない。夏道
 に瓜越峰まで力ぼる。本院岳はまいてザックをふいてからの登る。小さな
 ークを越えると西岳のキレットがある。夏道に鎖がはってあるのぶこい
 イル下使って登る。登り切った所が頂上である。頂上から西側に西尾根
 大きくはり出している。尾までのルートは部分的にはきびしい所もあるが、
 図のように全体がきびしいわけではない。尾はかなり大きなピークであ
 り大きくはり出し、ハイマツがはえている。尾まではそんなに難しくは
 が尾手前に大きなキレットがある。最低部へおりたが尾への登りルート
 からない。岩稜を調ったがすくわかうむりので沢を下る。2ピッチほど
 ボイレンして下り、さらに200m程下り、尾の稜をまく。西尾根に大き
 が降りついていた。尾と尾の間の沢をうめる。尾のピークはたてなかつ
 が残りだが、やむをえない。尾も尾も東側からきたと思ふ面のような
 のピークである。尾を下るところ200mくらいはかなり急なまけに本
 く、雪がくさっていてうまる。こけをぬけると比較的ゆるやかな稜線が
 残物積状に続いている。尾からすく偵察しぬかっているため、ルートと誤
 下りて尾根へ下ってしまった。疲労と空腹のため、テンバをサツげ、テ
 ントをける。

テンバ (6:50) → 瓜越峰 (8:20) → 本院岳 (8:50) → 西岳 (10:00) -
 P₁ (10:55) → B (11:35) → P₂ キレット (12:10) → P₂ (14:35) →
 (15:25) → P₂ (15:35) → テンバ (16:15)

30日 (曇後雨)

テンバより左におり、トラバースして主尾根にもとる。ここから一夜山まで洗羅板の上を歩いているようだ。約20のホピークが連なっている。高度もさがったため、ブアの中にナラ等の雑木がまじり、ブッシュもひどくなってきた。思ったより時間がかかり、一夜山のゴルについた時にはホッとした。ゴルにワックをおいて一夜山へ向う。急坂を200m程直登する。天候かわるく雨がふりそうなので早急にひきあげる。ゴルから下へは長ぐつ跡があるのでこれにそっていく。夏道もこの近くにあるらしい。土のみえたところでアイゼンをはきし、オーバーシュー、オーバーズボン等もとる。ほぼ道にそっていくと、田の中に古びた家が一户ある。水道のジャロがあるところを見ると人がいるのかもしれない。ここから沢にそって下る。地スベリ地帯らしくいたるところで土砂くず水がみえている。途中部落の人が総出で道ぶしんをしていた。河原におりて一休みし、ラーメンを食う。身なりをととのえてから出発。取手でバス時間が2時間もあるので鬼無里まで歩く。ついに雨がふり出した。

テンバ() → ゴル() → 一夜山() → ゴル() →
取手() → 鬼無里() → 長の() → 上田()



3 新人合同に至る経過と反省

昨年のSAC総括の中で“合同”の方針が打ち出されていながら、今年4月半ばには、これも合同が各部独自でやる方の議論を巻き起した。そのため準備期間10日余りという条件は、昨年と形態を同じくすれば、同じ困難でより返すだけで進歩がたい、といわんばかりである。しかし、それがわらず、才1回SACで統一した「新人のみ合同、二級生は各部独自で行う(但し同一場所にてBaseをおく)」の基本線を無視し、才2回SACまで昨年と大差の無い形態に陥らせてしまったのは、Leaderであるべき私自身が、自らの基礎を掘ったようにもいえる。才2回SACでのLeaderとしての態度は、私自身完全にLeaderの地位を失ったものと深く反省している。私には未だ決断を執行するという信念が欠けているようである。

上田山岳部の混乱(私にとっては柱を失ったようで非常に耐え難いものだった)は、特にこの点この点を私に批判してくれたのであろう。

批判の形には賛成できないが、そのような批判とあっては、今まで私の犯して来た罰なのであろう。

以上は入山以前の題であるが、入山後は山行目的のほぼ完遂をみたといえる。それが唯一の慰めである。

(記 佐々木)

新人・中堅層強化合宿 報告

- 目的: 雪上技術
- 期間: 1967年4月29日～5月6日
- 場所: 横尾周辺
- 参加人員: 佐々木(新人指導), 河原, 池内
- 行動

4月29日 } 新人と同
30日 }

5月1日 横尾本谷で雪上訓練

2日 洞沢で雪上訓練. 前穂5峰4峰→3,4のコル下

3日 槍沢→槍→横尾本谷

4日 河原蝶ヶ岳 池内沈殿

5日 3,4のコル→前穂→明神主峰→1,2のコル

→上宮川上部沢→ひうたん池→東麓

6日 下山

○反省: 行動をとるに同伴が二人だけだと残念が
ことだ。やはり例えどんな問題があろうとも参加する
べきである。単なるイデとオキの食い違いだけであ
る行動をとも伴うべきか、のは部員として失格であ
るか。一考を。

たった二人だけということに慣れ合いにたるとはい
合宿山行の意義を失ってしまふ山行であつた。記録
的にけさう悪いとは思ふか、内容がまずかた
とこに問題がある。技術の未熟, 軽率な点, 判断
の悪さなど今考へると実に怒りしきさへ感ずるので
ある。楽しい山行であつたか危険な山行でも
あつた。終つても穿堵感がたつ山が嫌になつた。(記池内)